

花木園から交流の輪を広げ “環境共育” を深める

畝本 典子（うねもと のりこ／石坂産業株式会社取締役社長）

— “花木園” に緑の訪れ—

花木園内の樹木に、淡い緑が陽光を浴び光輝く季節になりました。今年造成した森のオアシス野鳥ビオトープには、コガモや紫サギが定宿する姿が見受けられます。

「経営者環境力大賞」を受賞したときは、花木園内のコナラやくぬぎは裸木で寂寥とした景色が、山桜の訪れとともに新緑が芽吹き緑の回廊に変化しました。これから夏場に向け淡い緑から濃淡な緑に日々移り変わる風景は、空一面から七色の緑光が降り注ぎ、溢れるほどのフィトンチッドも愉しめる時季でもあります。

さて、私は「地域と自然と企業が共生」する革新的な経営に挑戦しています。本誌面では、“花木園”の緑の経営資源を活用し展開する“環境共育”についてお話します。

— “持続可能” を求め—

最近、「持続可能な社会」の言葉を頻繁に目にします。新聞雑誌や企業広報誌ではサステナブル（Sustainable）の語彙が多用されています。当会会報5月号の『「持続可能」は可能』の工藤泰子氏の原稿で、持続可能とは「現代の世代が、将来の世代の利益や要求を充足する能力を損なわない」意味が示されています。

私は、会長である父親から“企業は公器であり継続すること”（Going Concern）の同義語を教わった関係で、“Sustainable”より“Going Concern”の方がどちらかと云えば馴染みが深い。企業経営も個人の趣味・趣向の世界でも、物事を諦めず継続することは非常に大切で、それが未来の可能性の扉を開くのではないのでしょうか。

“続ける”は言葉では簡単ですが、実行するには強靱な意志が求められます。特に企業の経営に携わる者にとっては不可欠な個人の資質になります。不透明で激動する経済社会では、企業は絶え

ず荒波に揉まれながら、新たな細胞を作り蘇生を繰り返さなければならない。組織を蘇生するセルフメカニズム機能がないと、市場から放擲されてしまう。企業が公器として事業継続するには、外界変化を機敏に読み取り、変化に適応できる人材育成が不可欠で永遠の課題でもあります。

— 環境学習は “環境共育” —

リオプラス20が6月に開催されます。マスコミで騒がれている地球資源枯渇や温暖化問題について、誰が自然の荒廃・崩壊を察知し、継続し解決を図るのでしょうか。

私はその解を、一人ひとりが身近な自然環境に関心や興味を抱く心を養うことだと考えています。“自然を愛でる心”、“大切に作る心”を育てることが、自然の威畏や恩恵を学ぶと信じて疑いません。エコマインドは、大人も子供にも机上で教えるのではなく四季折々の草花に触れ合うことで生まれるもの。平成22年の国立青少年教育振興機構の調査研究では、子供の頃の動物の触合いの自然体験が多いほど共感性や人間関係能力が高いと報告されています。5月1日の毎日新聞には、仕事に疲れたとき森林を歩くと、ウイルスなどを殺すナチュラルキラー細胞の機能が高まり心身が癒される記事が掲載されていました。

昨年の環境教育推進法の改正にもありますが、私は花木園を、自然と触れ合う体験教室として整備することにしました。そして、私の信条の「教える“環境教育”ではなく、共に学び共に育つ“環境共育”」を推進することが、地域社会の健全な発展のために私に課せられた使命だと考えています。

— “環境ナビゲータ” の創設—

花木園内の森林パーク内を歩き回っても、樹木や昆虫の名称や地域に生息している生物や森の由来を知らないと、五感の感じ方が弱いかもしれない。見学者の年齢や知識に応じ自然を語り伝える

インタープリター（自然の翻訳者）のガイドを社内整備しました。何故ガイドか。電気自動車の急速充電器で、日本メーカーが開発した「CHADEMO（チャデモ）方式」についての記事を読んだとき、「開発した」「…方式」「アルファベットの横文字」は技術由来で脳が拒絶反応を起こし、ナカナカ情報が入りません。ところが、「CHADEMOは、Chargeの充電とMoveの動くことを掛け合わせた造語で、充電中に「お茶でも」いかがですか」の意味があると知り、スッキリ頭に入りました。自然と触れ合う体験学習も同じことが云えないか。そこで、地元のNPOと協働で森林インストラクターなど専門家や環境に造詣が深い人を募集し、「環境ナビゲータ」を創設しました。くぬぎの森環境塾の講師やガイド役を養成すると同時に彼らの能力を発揮する活躍のステージを与える一石二鳥を計ったものです。

おかげさまで、くぬぎの森環境塾では、環境アドバイザー／ナビゲータに21名が登録し、13講座を開講することになりました。

— “落葉の発酵温熱” を利用した足湯—

環境共育では、地域特有の自然と人々との暮らしとの関わりを学ぶことも大切なこと。特にこの地区の雑木林は、川越藩主の柳沢吉保翁が三富新田で開墾した地割で作られたもので、農家の暮らしとの関係が深い所です。地域の自然は、人々の生計と深く交わりながら独自の歴史・文化の形成に影響していますが、現代社会では、ライフスタイルの変化で地域特有の歴史文化が失われる兆候が見受けられています。

そこで、このたび蔵の片隅に眠っている多くの古民具や農具などを寄贈して頂いたのをきっかけに、三富の歴史・文化を継承する“三富語りべ資料館”を建設することにしました。この地域のユニークな知恵には、落葉が堆肥する過程で発酵する温熱を利用し川越イモの苗木を作ったものがあります。これは言葉では伝わり難いので、堆肥の発酵温熱を利用した足湯を造りました。資料館では愉しく体験し学べるよう工夫を随所で凝らしています。

— “里山ビオトープ” を創る—

国木田独歩が描いた美しい武蔵野の風景を再現し、未来の子供たちに残したい。そして地域固有の多様な生物が生育生息する環境も保存したい。子供の母親として自然を保護する強い思いを込め“里山ビオトープ”に着手しました。

実は、この取組みには伏線があります。花木園は、3市1町にまたがる通称“くぬぎ山”と呼ばれる雑木林の一角を占めています。2003年に県や市町村、地権者、市民メンバーで「くぬぎ山自然再生協議会」を発足し、この地区を特別緑地に指定する活動が行われています。しかし、利害関係の調整に時間を要し、10年経過しても結論が見出せず、この間にくぬぎ山は、荒廃の一途を辿っていました。朽ち老いる樹林を目の前にし、傍観者であるより「私たちが今出来ることをしよう！」この事案がやまゆり倶楽部の誕生と里山ビオトープ創りの源泉になったことも事実です。

現在、里山ビオトープ活動を、(公財)日本生態系協会のJHEP認証に申請しています。正式には学術委員会に諮り6月末頃の認証ですが、関係者からは“トリプルA”の最高ランクの取得見込みだと云われています。

— “環境共育” の広報活動—

その他、5月22日から25日に東京ビックサイトで開催されたNEW環境展に出展しました。そもそも環境展は機械メーカーの商品や技術の見本市ですが、私は、敢えて企業理念を売るソーシャルマーケティングの場としました。ブースデザインは斬新なカフェのイメージ、“一体何屋さんだろう？”と視認させ記憶にとどめる効果を演出しました。コンセプトは、「足休めにお茶を飲み、少し話を聞いてください、そして施設見学にきてください!」。地域特産の狭山茶や川越イモを振る舞い、研修やエコツアーなど施設見学を促し、環境共育の協働企画のパートナーを募集しました。

新鮮で爽やかな風を送ったと大反響、大盛況に終えることができました。環境文明21の会員の方も多く足を運んでいただきました。この場をお借りし厚く御礼申し上げます。